2011 年 08 月 10 日

# 物語の意味論

小山照夫　国立情報学研究所

## 1.はじめに

従来の分析哲学の立場からは、物語（フィクション）というものを重要視しない傾向が見られる。これまでの多くの考察では、物語として語られることは、現実の世界とは無関係のものごとであり、そこに現れる言明は、結局は偽であるか、せいぜいが無意味であるという扱いがされてきた。しかしながらさまざまな物語を単に「無意味な」ものとして扱って良いのだろうか。

## 2. 現実世界と物語

### 2.1. 物語の言語内使用

物語についてまず考えるべき問題は、まったくの虚構の物語であっても、現実世界では様々に利用されているものがあることである。人間は本来よくできた虚構を好む傾向があり、子供に話して聞かせるおとぎ話から、神話、空想小説まで、様々な虚構を記述するテキストが、日常生活において広く使用されている。

子供を育てる上で、架空の、非現実的な物語を聞かせることは、どの社会においてもほとんど必須の過程であり、子供もこの種の物語を聞くことに非常な興味を覚える。このことから、物語を聞きながら成長する事は人間にとって非常に重要な意味を持っていることが示唆されているとは考えられないだろうか。特に、後に述べる発想の問題は、この物語を好む性向と深く関連している可能性がある。

大人になってからも、小説や戯曲、古典文学などは趣味の対象として広く認知されており、場合によっては特定のジャンルに関する物語りについて語れることが社会的な関係を構築する上での重要な要件となることもある。

ここでは物語として語られるテキスト群が、社会の中で一定の使用価値を有すると考える必要があるのだが、もしこれらのテキスト群がすべて無意味だとするなら、この様な形でのテキストの使用をどのように考えるべきであろうか。

### 2.2. 現実と物語

一方で、虚構と対比される、いわゆる「現実」を記述すると信じてられている一連のテキストを考えてみよう。これらは虚構の物語に現れるテキストと明瞭に異なる性格を持つものと言えるのだろうか。

「現実」を記述したテキストは、漠然と真の、あるいは確実な情報を記述していると考えられているが、このことは無条件に認めて良いものだろうか。実際には、これらの中にも、虚構の物語と区別のつけにくいものが存在しているとは言えないだろうか。

人間が「事実を記述している」と考えるテキストには、例えば主体の実際の体験をテキストとして記述したものもあるが、この他にも、直接体験を反映したものではなく、周囲からの伝聞に基づくものも大量に存在している。これらの伝聞に由来するテキスト群の中には、実際に事実を反映したものもあるが、一方で事実とは異なる記述が存在する可能性もある。

伝聞情報の中には、例えば新聞記事のように、形式上物語と同じ形をしているものがある。新聞記事ではしばしばその根拠となる情報にも言及する事を除けば、たとえば同じように国際紛争の経過を記述した架空の小説の一部が、新聞記事と同一の形式を取ることは大いにありうることである。この場合に事実記述と虚構とを区別する根拠としては、せいぜいこれまでの経験から情報源がより信頼できると言うこと以上のものではなかろう。このことはもちろんそのような情報源からの情報がすべて事実を伝えていることを保証するものではないことを示している。

また、利害の込み入った社会関係の中での伝聞情報の中には、一見事実記述の形式を装いながら、語り手が意図的に事実と異なる情報を発信するものもある。この場合むしろ情報その物は虚構と言うべきであるが、その

記述形式は一般には事実記述と区別がつかない。これらの、事実と異なっていたり、信頼性の低い記述は、むしろ虚構に近いものであると考えるべきではなかろうか。

伝聞情報に関して言えば、以上のことがらを踏まえて、受け手の方でもすべてをそのまま事実として受け取るわけではない。そもそも語られたことを受け手が理解する際には受け手の側での解釈が介在するのが通常であり、語り手の意図した情報がそのまま受け取られるわけではない。また、解釈の結果その事実性が疑わしいと感じられたセンテンスについては、単純に無視するか、あるいはより複雑な解釈を採用するなどが行われる。情報の受け手はこれらの解釈を通して全体的な整合性を保とうとするわけであるが、それでも一般にはすべての情報が確実に真であると確信することは困難である。

一方、体験に基づいて記述された事態や法則は、一見確実な情報を記述していると見えるかもしれないが、実際には錯覚や見落とし、勘違いなどがあり、必ずしも全面的に信頼できるものではない。以前に信じていた体験の記憶を後になって修正せざるを得なくなることは決してまれな事態ではない。

伝聞情報が結局のところ、誰かの体験に基づくものであることを考えるなら、この体験情報記述の不確かさは、たとえ語り手が事実を伝えようとしていたとしても、伝聞情報もまたこの種の誤りを含んでいる可能性のあることを示すものでもある。特に所属する社会コミュニティのメンバーからの情報は、語り手の事態に対する理解がどこまで信頼できるかという問題を常に孕んでいる。

これらの、体験や伝聞に基づいて事実を記述する情報とみなされる言語記述に加えて、主体の発想というものについても考える必要があろう。人間はしばしば未知の状況に直面したとき、これまでに経験したことのない事態の説明や行動方針を思いつく場合がある。発想はしばしば有効なものであり、実際に当面の事実と仮定されて行動計画作成に有効に用いられることがあるが、しかし一般にはその正当性が保証されているわけではないし、また、しばしば仮定が誤っていたことが明らかになる。したがって発想の場合、単に架空の物語を作成している場合もあると考える必要がある。にもかかわらず、誤ったものも含めて、発想の能力自体は重要なものであると考えねばならない。

これまでの考察からは、物語の中にはたとえ架空のものであったとしても、その使用を考えることができるものがあること、また、いわゆる「現実」と物語の境界はしばしば曖昧なものであることがわかる。

## 3. 物語の情報モデル

### 3.1. 物語群モデル

実際には人間は現実と物語とをどのように扱っているのだろうか。ここでは、人間は事実と考えられるものも含めて、いくつかの関連するセンテンス群をまとめて、それぞれのまとまりごとに物語として扱っているというモデルを考えてみよう。

このモデルに従えば、人間は非常に多数の物語群を同時に認識していると想定されるが、この中のすべての物語は相互に関係しながら、あるものは他のものと統合されてより大きな物語を構成することができると考える。また、物語群の中には、とりあえず事実を記述していると信じられている集合があるが、この集合は、主体の行動計画立案に当たって前提とされるものであり、行動計画に唯一関わりうるものとして、特権的な「事実物語」を構成していると考える。

### 3.2. 事実物語の特権性

事実物語が特権的であるのは、これが主体の実際の身体的体験としての行動や知覚に基づく記述を含むからであり、主体のこれからの行動に直接関わってくる可能性を持つ所にあると考えられる。実体験の記述は、たとえそれが誤りを含んでいる可能性を持っていたとしても、やはり実際の行動決定に当たって最も影響力の強い情報と信じられることになるであろう。人間にとって最も重要なのは、最終的な欲望達成へ向けての行動であることを考えるなら、行動の根拠を与えると信じられる身体的体験と直接関連を持つ事実物語が特権的なものとなることは当然とも言えよう。

一方で人間はその身体体験の周囲に、伝聞情報ではあるが、ほとんどの場合身体体験と整合性がとれると想定する一連の物語があると信じており、これらを統合したものが事実物語を構成することになる。このような伝聞情報としては、社会コミュニティーの中で流通している情報や、各種公共メディアが伝える情報等が含まれるが、これらの物語が事実物語と整合的であると信じられるのは、一つには社会的認知があると信じられていること、

また一つには経験的に体験との整合性が相対的に高いと信じられていることがその根拠となっている。

### 3.3. 物語間の整合性と統合可能性

事実物語を含めて、物語は、複数並列して存在し得るが、一方で場合によっては複数の物語が統合されて一つの、より規模の大きい物語を構成する事もある。物語が統合できるかどうかは、特に現実物語の場合に重要で、統合によってさらに詳細化された情報に基づく行動計画作成が可能となる結果、一般にはより有効な行動が可能となると期待される。

物語が統合されうるかどうかは、二つの物語の間に基本的な整合性が存在するかどうかにかかっている。もしも二つの物語りに出現する対象や事象に矛盾が存在せず、法則として想定される規則への違反もないとするなら、二つの物語は統合可能であると考える。逆に、出現する対象や事象に矛盾が存在したり、お互いの仮定する規則に違反するところがあるなら、それらを統合することはできない。

実際にはここで統合と呼ぶものは、もう少しゆるやかなものであることに注意しよう。人間は本来厳密な意味では統合できない物語を、矛盾する部分を省略したり、あるいは解釈を変更したりして、強引に統合する事もある。見方によってはこれは、複数の物語から新しい物語を作り上げていると見ることも可能であろう。

照合される物語の間の整合性が直接的には確認しにくい場合もあるが、このような場合には、とりあえず統合可能な物語として扱われるであろう。例えばある種の報道やコミュニティー内の情報交換などで、情報源が信頼されている場合には、整合性の厳密な確認なしに、物語を現実物語にとりあえず統合する事もある。この様な場合、後になって整合性の破綻が明らかになったとき、一部の物語を現実物語から排除する事も起こりうる。

物語の統合を行うことは、言語操作能力の一部であると考えられる。言語操作能力は、状況や文脈に応じて与えられた言語記述を解釈したり、目的に適合する言語記述を生成したりするが、この機能によって物語の統合が可能となると考えられる。この機能は想定しうる物語群に対してメタレベルの言語機能であると考えられる。

### 3.4. 事実物語の時間変化

人間はその欲望を実現させるために、絶えず変化する世界に適合しながら行動計画を立案・調整し、実際の行動を起こしていく。言語操作能力もまた、行動との関わりを持つはずであり、行動決定に関わる一連の過程の中で、物語群とメタレベルの言語操作機能がどのように関わってくるかが問題となる。

まず第一に、状況としての世界の変化は、感覚器官を通じての実体験によってか、あるいは新しくもたらされた伝聞情報によって認識される。これは新しい物語が既存の物語群に付与されるプロセスと考えることができるであろう。言語処理能力は、新しい物語がどの物語群と統合可能かを判定するが、とりわけ事実物語とみなされている物語群との関係が重要視されるであろう。

ここでは、了解された物語がそのまま事実物語に統合されるか、事実物語には統合できないと判定されるか、あるいは新しい物語または事実物語の一部について、解釈を変更するなどの変更をほどこすことによって統合を可能にするかのいずれかが選択されることになるであろう。

従来信じられていた事実物語への解釈が変更される場合、これまで統合できないと判定されてきた物語が、そのまま、あるいは多少解釈を変更して統合できる可能性が生じる場合も考える必要が生じる可能性がある。

いずれにしても状況の変化は新しい事実物語を構成する可能性を持っているのであり、主体は新しい事実物語を前提条件として、新しい行動計画を策定し、実効に移すことになる。この際にまた、新しい発想を思いつくことも考えられるのであり、発想から得られた事実や法則性を前提にして、行動計画が作成される事もあると考えられる。

行動の結果は通常は世界の状況を変化させることになる。また、世界の状況は主体の行動以外にも変化する要因を持つのであり、これらの変化に追随しながら事実物語の調整と行動計画の修正を繰り返しながら行動を続けていくのが主体の働きであると考えられる。

### 3.5. 統合リスクの考慮

事実物語の修正では、整合性に加えて行動面でのリスクも考慮されていると考えられる。主体は行動計画を作成するに当たって、行動が成功したときの利益も考慮するが、それと同じくらいに行動が失敗したときのリスクについても考慮する。そこで、ある物語を事実物語に統合すべきかどうかにあたり、かなり整合性が低いと考えられるものであっても、整合性が存在する可能性が皆無でないなら、その物語を無視することによって生じる可能

性のあるリスクと、リスクを回避するコストにについても検討することになる。

典型的な場合としてはなにかの「たたり」を恐れる場合を考えることができるであろう。存在確認ができていない何かが存在して、場合によっては現実世界の状況に効果を持つということは、整合性という観点からはほとんど統合不可能な物語であるにもかかわらず、例えば道端の石に向かって手を合わせる程度の些細なコストであれば、とりあえず払っておこうとすることもある。

整合性に基づく物語の統合は、常に厳密に行われるわけではない。例えば直接行動計画に関係しない物語りについては統合可能性があまり厳密には行われないと考えられる節がある。結局のところ、たとえば昔一回限り起きた話であるとか、遠い場所での出来事であるなどの物語は、通常は直近の行動計画には関係しないと考えられるのであり、この場合には統合が可能かどうかを厳密に検討するということは厳密には行われない。童話などで、狼に飲み込まれた少女が生きたまま腹から出てきたという物語であっても、それが現実物語に厳密な意味で統合されうるかが問題とされることは通常はない。

### 3.6. 物語構築と発想

物語に関してもう一つ考慮すべき問題に、発想と言う問題がある。発想がどのようにして起きるかについてはいくつかの可能性を考えることができるが、発想には、実際に有効なものと無効なものとが存在する。ここで、無効な発想は、現実物語に対して整合性がないという点で、虚構に近い性格を持つと言えよう。すると発想一般は、虚構を構成するプロセスを含むという意味で、新しく物語を構成することであるとも言えるであろう。

発想の契機について、例えば欲望達成のための部分目標というものを考えてみよう。欲望達成は一般にはいくつかの部分目標の達成によって実現されると期待される。ここで実際的であると信じられる既知の知識から目標達成のための具体的行動が明確にできるなら、単純にそのような行動を起こす計画を立てれば良い。問題は具体的行動を思いつかない場合、あるいは行動を起こす上での障害が存在する場合である。

ここで採用しうる戦略としては、そもそも部分目標はそのままである必要があるのかを再考すること、および、目標達成のための他の行動計画はないのかという問題である。もちろん目標達成自体を延期するという判断もありうるが、これは今は考えない。

目標を置き換えても良いかどうかについては、そもそもの欲望との関係で、何か類似した目標がありうるかが問題となる。現在設定している目標と類似で、置き換え可能な目標を選び出すためには、候補となる可能性のあるいくつかの目標を想定しながら、それが達成されたときの状況を想定してみることとなる。

一方、行動計画については、元の行動計画の一部を変更しても目標が達成できるかどうか、あるいは同一ではないが類似の結果をもたらすと期待できる行動の一部を変更することによって目標が達成できないかが検討され、実際にそれらの行動をとった場合に何が起きるかを予想して見ることとなる。

いずれにしても、これまでの経験からうまくいくことが保証されているわけではない方法である以上、想定された多くの可能性については結果を予想する段階で既に非現実的と判断されるであろう。しかしいくつかの場合には、実際に行動してみなければ結果は分からないが、うまくいく可能性もあると判断される事もある。ここでもまた、一見うまくいきそうな行動の多くは、実際に実施してみると失敗に終わる可能性が高いが、それでも行動計画を立案できるということは、少なくともその可能性を思いついた段階では、ある種の物語を構成していると言っても良いであろう。これを実際に行動に移すことにより、新しい物語が現実物語と整合性があるかどうかが明らかにされると考えて良い。

人間の特性として、発想の結果得られた行動計画について、明らかに不可能ではないと判断されるなら、少なくともその一部については、実際に試みてみる傾向があると言える。不確実な計画を実行にうつすかどうかにあたって、リスクが少ないと考えられるなら、とにかく試してみるという戦略がとられるであろう。一方、ある程度以上のリスクが想定される場合、行動の全部ないしは一部を、リスクがそれほど大きくない状況の下で試行してみるなども考えられる。ここでは物語りに基づく行動が試されているのであり、このような行動様式が人間の生活を大きく変化させてきたと考えても良い。

人間が自然界の法則性を発見してきたのは、帰納に基づくと考えられてきたが、新しい有効な行動様式の発見がこの様な形で起きるとするなら、法則性の発見は必ずしも多数の繰り返し事例を必要とするわけではない。もちろん過去の経験回数が多い場合の方が、発想がより容易になることは考えられるのだが、例えばただ一回しか経験しない事例についても、以上のような発想が働くなら、その法則化は可能である。ここでは確実な推論ではない誤謬推論であっても、実際の世界に対応付けて実験することができるなら、それらのうちで有効なものを

発見することができることを示唆していると言えよう。
　目標の変更にせよ、行動計画の変更にせよ、類似性に基づく別の状況への適用可能性を想定してみるという点で、物語構成の能力が必要とされる。人間が以前には経験していない行動を考案して実行に移す上で、物語構成能力は大きな効果を持つ。物語構成能力に優れているということは、不必要なリスクを避けるという条件の下ではあるが、より少ない経験に基づいて、より多様な可能性を発見できるということに通じる。人間が比較的短時間のうちに、様々な技術を身につけて来たことの背景には、物語構成能力が大きな役割を果たしていると考えられるのであり、この能力に優れている事が、生活の上で重要な意義を持つと考えられる。子供の時代に多様な、しばしば全く非現実的な物語に接することは、物語構成能力を涵養する上で有用と考えられるのであり、虚構の物語を聞きながら成長することには実は大きな意味があるのだと考えられる。

## 4. 物語に関連する問題

　物語の虚構性は、分析哲学にいくつかの問題を提起してきた。ここではそれらの問題のうち、指示の問題と否定言明、特に存在否定言明に関して、物語群のモデルから考察を行う。

### 4.1. 物語内の指示について

　分析哲学では、物語のテキストを解釈する上で、テキストに出現する指示記述に、対応する指示対象が本当に存在するかどうかが問題とされてきた。ラッセルの例では、「現在のフランス国王は禿げている」という文が問題とされており、ラッセルはこの文の真理値が真であるためには「現在のフランス国王」という確定記述で指示される対象の存在が保証される必要があるとして、対象として存在しない指示記述を含むこのテキストの真理値は偽であるとした。後の研究では、この文に見られる指示については、指示対象がそもそも存在しないのならば、真理値を考えること自体意味がないという見解も有力である。
　確かに一つの文のみを取り出して考えるならば、指示対象は存在しないとした上で、文は無意味であるとすることが自然であるように見える。しかし、複数のセンテンスからなる物語で、複数箇所に同一対象への指示と見られる記述が出現する場合にもこの考え方は有効であろうか。
　オデュッセイアのような長大な物語では、「オデュッセウス」という固定指示詞が繰り返し現れるが、この指示詞に対する対象がいかなる意味でも存在せず、この指示詞を含む文はすべて無意味ということになるとするなら、そもそもこの物語は何事も記述していないことにならないだろうか。しかし、物語の読者は、物語の現実的な使用を行い得るのであり、この際に物語から何かを読み取っていると信じていることも事実である。
　言い換えれば、現実の言語使用では、少なくともこの物語を参照した発話が一定の意味を持って成立している。そこでは「オデュッセウス」と呼ばれる対象の知謀や英雄性、物語から読み取れる教訓などが問題とされるのだが、ここでもこの指示詞の指示対象がいかなる意味でも存在しないのなら、これら現実の発話もすべて無意味ということになる。これは信じ難い事のように思われる。
　ここで言えることは、物語の中で指示が行われるなら、その指示対象は少なくともその物語の中では存在すると考えざるを得ないということではないだろうか。
　一方で、「オデュッセウスは存在しない」という非存在言明が妥当である文脈も確かに存在している。この存在否定言明が妥当となるのは、どのような事情によるものであろうか。確からしいのは、この非存在言明は問題とする指示記述が出現する物語の外で語られるべきものだということである。ある物語が別の物語と比較されるとき、とりわけ事実物語と比較される場合には、二つの物語の記述が統合できるかどうかが一つの問題になる。ここで、非存在言明は、指示されている対象の存在を認める限り、二つの物語を統合できないということを示していると考えることができよう。主体が行動計画を作成する前提とする事実物語との統合では、統合されることによって行動計画が変わることが予想されるのだが、非存在言明はこのような統合は不可能だということを主張していると考えてよい。

### 4.2. 否定言明の言語レベル

　ところで、この非存在の言明は、構造からして、少なくとも存在を否定される対象への指示を含む物語に対して、メタレベルの言明になっていると思われる。複数の物語りに対して、その統合可能性という視点から、一つの物語内の対象を別の物語りに移行することの不可能性を主張するものになっているのは、メタ言明の特徴であると言

えるだろう。ここで考察が必要となるのは、物語の中で存在否定以外の否定言明が出現する場合である。同一言語レベルの記述として、否定言明を含む物語は果たして可能であろうか。

タルスキ流の真理論に従うなら、言明の真理値に関する言明はメタレベルでなければならない。否定言明は真理値に関する言明であるように見えるのだがこれは、元の言明に対してメタな位置づけがされなければならないことを示しているのではないだろうか。これが正しいなら、否定言明を含む物語は、実は相対的に低いレベルの言明と、このレベルの言明に対するメタな言明を含むことになる。

この様に考えることの難点の一つは、例えば「彼女は美しくない」という程度の否定言明であっても、何らかのレベルに対するメタレベルの言明になるという問題である。実際、この言明がもし、「彼女が美しいということは偽である」という言明と等価なものであるとするなら、確かにメタレベルの言明であると考えざるを得ないように思われる。

ただ、一般の否定型センテンスが常に真理値を問題にしていると解釈する必要もないように思われる。物語の中に現れるのは単なる記述であり、そこでそのまま真理値が問題にされていると考える必要はないだろう。すると、否定言明は、存在否定を除けば、それ単独では単なる記述であり、物語の中で真理値が問題にされているわけではないことになる。

一方で、わざわざ否定形を使用することの効果と言うものは考えられるかもしれない。単に何も言及しないか、あるいは肯定形で「彼女は醜い」ということと比較するなら、否定形を使用する効果の一つは、肯定形を含む形の物語を予め統合不可能なものとするところに効果があるのかもしれない。

もちろん、メタレベルでセンテンスの真理値を問う形の否定言明を、物語の中で使用することもありうる。「彼の証言は嘘だ」という文では、明示的に別の箇所で提示されたセンテンスの真理値を問題にしている。ここでの構造は、物語がすべて均一なレベルで語られているわけではなく、部分的に「彼の証言」に基づく相対的に低レベルの物語が含まれていることが提示された上で、最終的にはこの部分的物語は本体とは整合性がないものだということが主張されていることになるであろう。

否定文は一般に物語内での単なる記述か、あるいは他の、関連する物語との整合性を問うメタ記述かであるが、真理値を問題にしながら、なおかつ一つの同一レベルの物語内での記述としての否定言明が作れるかという疑問がある。この問題を考えるとき、論理学でパラドックスを引き起こす定義の中には、自己言及的な言明を否定するものがあることに気づく。

ラッセルのパラドックスは、「自分自身を元として含まない集合の集合は自身の元である」という形で自己言及的な否定記述を含んでいる。この言明は真理値が問題となっているから本来はメタレベルの記述であるが、一方で自己言及をしているところから、オブジェクトレベルの記述でもあるように見える。この記述が成立するということは、オブジェクトレベルがそのままメタレベルとなっていることであろう。この様な言明は本来パラドックスを導く可能性を持つものと言えるであろう。